

先週は、喜びにあふれたイースターを捧げることができました。感謝いたします。受洗された4名の兄弟姉妹の、新しい信仰生活に、主の祝福が豊かにありますように。私たちも、共にその恵みを分かち合いながら、歩みを続けてまいりましょう。

大きな喜び

ルカによる福音書は「喜びの福音書」と呼ばれるほど、喜びという言葉が使われています。今朝の箇所でも、喜びの三重奏が響いています。7章の罪許された女の記事や、クリスマスの2章でも、喜びの光があふれています。

私たちの歩みを、明るく照らすものは内なる喜びだということができるでしょう。日本は、裕福な国ですが、本当の喜びを掴んでいない人が多いと言われます。目に見える豊かさや、周りと比べる気持ち、自分自身をダメだと思ふ消極的な思いなど、様々な誘惑によって、喜びの響きが心からかき消されてしまいます。神様が喜びを与えてくださらないのは、自分が罪深いからだ、理解できていないからだ、と思ってしまうのですが、それは大きな勘違いであると今朝の箇所は示しています。なぜなら、主は罪人が悔い改めることこそ、天国の最高の喜びである、と語っているからです。

でも・・・と思う私たちのためらいがあるならば、逆に考えてみるのはどうでしょう。天国の嘆き（ちょっと矛盾していますが）は何か、という黙想です。それは、この世に悪があること、怒りや憎しみがあることでしょうか。イエス様の例え話では少し違う気がします。その答えは「見失ってしまうこと」です。

中学生の時、修学旅行で京都に来ました。銀閣寺前の通りで、お漬物の味見に夢中になって、なんと財布を落としてしまいました。また先日、木群年会の出張先で、帽を忘れてきました。家族が誕生日にプレゼントしてくれたものです。無くし物って、本当に嫌ですね。自己嫌悪にもなりますし、探しても見つからないという喪失感があります。天国は、神との関係を見失った人間達への嘆きがあるというのです。その人の中身ではなく、音信不通になってしまったことへの嘆きなのです。

最高の喜び

人間は失ってみて、初めてその存在のありがたさが分かるものです。聖書が語る喜びは、この失われた関係が、取り戻されたという奇跡だと語っています。それが、私たちに与えられる喜びの本質だということです。

先ほどの話の後日談ですが、親切なお漬物屋さん、わざわざ財布を後日郵送してくださいました。帽子は、一緒に食事をした友人が見つけて、保管してくれました。人の優しさと温もりを何十年経った今でも感じ、感謝がよみがえります。

この喜びを見失わない生き方をしましょう。十字架はそのための犠牲なのです。